

## “Brother Jacob” : Idiot としての Jacob

鶴川 雅江

倉敷芸術科学大学教養学部

(1997年9月30日 受理)

### 序

1860年に著された“Brother Jacob”(以下, “Jacob”)は, しばしば並べて比較される“The Lifted Veil”(以下, “Veil”)に劣らず, 否定的な批評が多い<sup>1)</sup>。そればかりか“Jacob”は, 酷評を受ける以前に, 関心を払われることすらままならない。批評家たちにもその著作内で, George Eliotの一作品として数えられることさえ困難で<sup>2)</sup>, “Veil”よりも不遇な扱いを受ける作品といつてよい。*Romola*の商業的な失敗の埋め合わせとして, “Jacob”を贈られた George Smith は, 1864年の手紙でその感激を伝えている<sup>3)</sup>が, この贈り物は果たして本当に, 批評家が冷遇するような些細なものなのだろうか。

最終的には“Brother Jacob”と題される本作は, 執筆当初は Eliot によって, “Mr David Faux, Confectioner”と名付けられていた。そこで数少ない批評では, もちろん登場する頻度や割合から考慮すれば理解できるものの, David が main character として扱われ分析の対象にされることが, 当然のようになっている。彼の母親や兄, Grimworth の人々への欺きに対する Nemesis の罰がテキストの大意であり, 関心の的が弟 David に集中するのは止むを得ない。しかし, 表題の兄 Jacob の存在はどうなるのだろうか。“idiot”という素材のせいか付屬的に見做され, その存在が軽視され過ぎているきらいはないだろうか。

本論では, idiot とされる Jacob を分析し, どのように機能するかを探りたい。Jacob が意図的に“idiot”である事を強調される実例を挙げその意味を考え, それを探るため当時の社会における idiot の姿, 彼を象徴的に描写する記述, 彼の character としての特色について順に述べてゆくことにする。

### I

“Jacob”の最終的なタイトルが決定する前には, “The Idiot Brother”という候補もあった。その事実では, Eliot がかなり意図的に Jacob を“idiot”と設定したことが推察される。だが客観的に眺めてみて, このテキストで Jacob が“idiot”でなければならぬ必然性は, 本当にあるのだろうか。ところで, Jacob の弟の David は明らかに, 冒頭部の motto にある“trompeurs”(deceivers)のひとりである。そしてここで既に読者には, 因果応報の教訓的な plot が展開されることが, 予想される。最初は懲らしめられる人物が, David とは分からなく

とも、徐々に明らかにされていく分かりやすい仕掛けになっている。その平易さが、Eliot の長編小説の複雑な構造と比較された場合に、このテキストを大作という位置付けにならしめない一因でもある。

では実際に、その兄弟の描かれ方を眺めてみよう。David が母の金を持ち出して隠そうとするそのとき、そんなことは何も知らない Jacob がやって来る。David は別の目的で携えている lozenges を差し出し、“idiot” である兄の興味をそらす。

[W]hy, an *idiot* was preferable to any other sort of witness. For the first time in his life, David thought he saw the advantage of *idiots*. (8)<sup>4)</sup> (イタリック筆者)

目撃者が *idiot* ならば都合がいいと心中で叫び、David は悪事を目撃されるこの時点で、生まれて初めて兄の精神的な特徴に利点を見出す。しかし、安堵の息を漏らすのも束の間、David にとっては、すぐに状況が暗転するのである。

David, not having studied the psychology of *idiots*, was not aware that they are not to be wrought upon by imaginative fears. (9)

Ah, no! It's of no use to have foresight when you are dealing with an *idiot*: he is not to be calculated upon. (9) (イタリック筆者)

計算高い David は、いつも必ず過程や結果を想定してから行動を起こすが、“idiot” が相手では、予想しようにも無駄であると思知らされる。兄 Jacob に、通常考えられる人間心理の原則を当てはめて判断しても、彼が“idiot” ゆえの外れなものになる。Jacob は、想像力に幻惑されることなく目の前で起こる事象にだけ反応し、他の何事にも囚われない自由を謳歌している。lozenges の音や味をじっくりと味わう楽しみ方を振り返っても、その時の感覚にのみ集中して反応する、Jacob の姿が読み取れるだろう。計算が無駄になり、ことごとく予想が外れてゆく<sup>5)</sup> David に、現実味のない茶番的要素が見いだされるのも否めない<sup>6)</sup>が、この痛恨な喜劇を目の当たりにする読者の心地よさも無視できまい。読者は難しいことを考えなくとも、まるで lozenges を楽しむ Jacob のように、この心地よい感覚を享受するのである。この場面の最後には、David も、“an idiot's secrecy is itself betrayal” (12) とまで悟らされる。上記のどの引用にも“idiot” の語が見いだせることから、語り手の“idiot” という表現、素材への依存が明らかである。David は、兄の Jacob という人物に対峙するというよりも、“idiot” という存在に振り回されている。Jacob と David が互角に向き合える立場にあるならば、この plot は成り立たないといっても過言ではない。さて、そんな苦労をしながらも、Jacob にビールを飲ませて寝かせたすきに、辛うじて David はその場をしのぐことになる。この時点で早々に捕まって家族に連れ戻されれば、罪を大きくせずに済むものの、David は更なる罪や嘘を重ねるべく、また Jacob に振り回される運命ゆえに、すぐには放免されないのである。

その後 David が Mr Freely となってから、再び Jacob が登場するのは、Chapter III も終わりに近づく頃である。Chapter I の設定では、ほとんど二人の兄弟の間のみで盗みの現場や逃亡の様子が展開されるが、ここでは周囲の人々が存在することで、二人の醸し出す喜劇が、より効

果的に描かれる。家系を偽って、自らを善人 “loved honesty, very tenderhearted” (22) と呼び、かつては四旬節の日曜日に教会へ行かず、よりもよって盗みという悪事を働いた David が “a very regular churchman” (28) となり、救貧や教会の役職をこなしている。そして Jacob が現れた時には、“I’ve always thought it a duty to be good to *idiots*.” (48), “All men are our brothers, and *idiots* particular so.” (50) (イタリック筆者) と発言し、その偽善は頂点に達する。ここでは “idiot” という語が、David の偽善をより強調するのである。即座にそのように idiot 擁護の演説をしたものの、Jacob を追って来る兄 Jonathan に、“I [Jonathan] don’t see why *you* [David] shouldn’t have some trouble and expense with him [Jacob=idiot] as well as the rest of us.” (53) と、結果的には自らの発言とは全く逆に、“idiot” についていたわりの義務など果たしたことの無い、過去の行動が暴露される。Jacob が “idiot” でなければ偽善をそれほどに深める事なく済むのであるが、更なる偽善に足をすくわれてしまう。悲劇はもとの環境や地位が高ければ高いほど、後の転落が強調されるという<sup>9)</sup>が、David にとっての悲劇（逆に言えば、他の character たちと読者にとっての喜劇）は、それまでの Grimworth での Freely の成功が華々しく、偽善が最高潮に達しているばかりに、なおさら明確になるのである。

このようにテキストの Chapter I では、予知できない状況を作り出し喜劇の要素を強めるものとして、また Chapter III では、David の偽善をより明確にするものとして、“Jacob” は “idiot” という語に、かなりの恩恵を被っている。Jacob が idiot として設定されることによって醸し出される効果により、知的な負担の少ない分かりやすい plot となり、読者は Jacob 自身の生き方に見られるような、直接的で感覚的な楽しみ方を見出すのである。

## II

Jacob の “idiot” たる所以を考えるうえで重要なのが、当時の idiot 観であろう。19世紀より以前の英国では、精神遅滞者に関する認識と理解はさまざまであった。社会の表面からは遠ざけられ、ひそかに家族によって世話され、その保護に恵まれない病人は、徘徊するままに放置された。しかし、アサイラムの建設などとともにコミュニティの負担が増すにつれて、次第に両親の犯した罪の結末、あるいはなんらかの発生学的な欠点があり、人間以下の種に復帰したものの、という世間の見解に至る。比較的のんびりとしていた人々の意識が、19世紀には『種の起源』(1859) に代表される科学の進歩、産業革命の近代化とともに差別化を生み、それが顕在化し始めるのである<sup>9)</sup>。

Charlotte Brontë の *Villette* (1853) の15章、“The Long Vacation” に登場するのは “a poor deformed and imbecile pupil, a sort of crétin” である<sup>9)</sup>。Jacob は、“not an intense idiot” (7-8) とされているが、“imbecile” は “idiot” よりも軽度の精神薄弱である<sup>10)</sup>。一時その生徒と休暇を過ごすことを余儀なくされた、語り手 Lucy Snowe は、後になって振り返り、宗教家や道德家、禁欲家などがどう言おうともその世話は苦痛であり、“The first month was, indeed, a long, black, heavy month to me.”<sup>11)</sup>と述べている。自伝的要素の強いテキストのなかで、殊にこの章は自身の体験

から描かれたとされて有名だが、Charlotte の Brussels での苦闘が顕著に表れている<sup>12)</sup>。しかし、実際にその休暇を共にしたのは、精薄者ではなく健常者のフランス人女性であった。Charlotte にとって、冷淡で放埒な彼女と過ごすことは苦痛でしかなく、自らの神経を痛めつけられるほどになってゆく。“imbecile pupil” の起用を促したのは、語り手と相手の意志疎通の障害を、精神薄弱という具体的な形で呈示することにより、読者に容易にまた明確に想起させ、その苦痛を強調する目的であると思われる。このようにリアリズム色の濃いこの作品には、良心の呵責を感じつつも、その対応に戸惑う語り手の姿が描かれる。

一方“Jacob”は、それほどリアリスティックとはいえない、寓意性の強い作品である。Pinion は、Eliot と同様に“idiot”を素材に取り上げる Wordsworth を引き合いに出す<sup>13)</sup>。Wordsworth が楽しみながら詩作した経緯を、Eliot にも重ね合わせて紹介しているのである。“Idiot Boy” (1802) と題される詩は、病人の看病に追われた母親が、不安ながらも idiot の Johnny に医者を呼んでくるようにと使いに出すが、フクロウの声に夢中でなかなか戻って来ない我が子を探して、結局は病人を置き去りにして迎えに出掛け、苦心の末無事に見つけ出すという内容である。そのような息子を、緊急時とはいえ送り出す母親のコミカルな愚かさが指摘されているが<sup>14)</sup>、他にも Johnny への愛情、彼の純粋さに見られるロマンティックな姿が読み取れる。Wordsworth の創作に関する記述を眺めてみると、現代の我々から見れば、Wordsworth 自身にも偏見がないとは言えないものの、世間の“idiot”への偏見は、当然のこととして否めないものであったようだ<sup>15)</sup>。しかし詩人は、世論に屈することなく自らの概念を打ち出し、“Idiot Boy”と題した詩を発表する。そして Wordsworth は、その創作段階においても、また後に読み返すときにも、常に“pleasure”を感じたという。Eliot は、idiot の Jacob に関して語ることはないが、彼女もまたコミカルで自由な“idiot”像を描く。そのせいで、確かに Eliot 小説の特長のひとつであるリアリズムに欠く結果を招いている。しかし前章でも触れたように、弟 David との比較により、Johnny のほどにロマンティックではないものの、やはり先入観に囚われず純粋に自らの感覚に従う、自由な存在を打ち出している。Eliot と Wordsworth はともに、内容はコミカルでありながらも“idiot”を用い、知性に偏重しないからこそ生じる、自由で純粋な側面を強調する。idiot の息子への母親の愛情という点も、詩と“Jacob”の両者に見いだすことができる要素である。Pinion が、Eliot と Wordsworth の創作態度に共通性を見いだすのも、妥当であると言えるだろう。

このように“idiot”像は、否定的にも肯定的にも、その目的にかなった効果を狙った多少のデフォルメをも含みながら描かれる。弱者が弱いままで描かれ、ありのままの姿を示そうとする試みもあれば、また視点を逆にすることで、弱者を健常者には獲得不可能なものを持つ、強者とも見做すテキストもある。19世紀当時の偏見や危険な優生思想の広がりの中で、強者として描かれるこれらの“idiot”たちは、時代への警鐘を鳴らす役割を担う。次の章では、Jacob の idiocy から派生する、象徴的な描写を眺めることにする。

## III

Jacob の存在を何よりも象徴するのは、彼がいつも携える "pitchfork" であろう。農業者或いは生活者としてのシンボルと捉えるむきもあるが<sup>16)</sup>、勤勉を象徴する素材として見做すのは無理があるのではないか。もし彼がいくら働き者であったにしても、何も弟を追って訪れる Freely 家にまで、pitchfork を携えてくる必要はないであろう。とまれこの点から観ても、彼が "idiot" であることに、必然性が感じられよう。では弟 David の恐怖を駆り立てることと関連し、Devil の持ち物 "trident" を連想させるものとして<sup>17)</sup>、捉えてみてはどうだろうか。ずる賢く計算高い David にとっても、計り知れない存在である Jacob は、"like a triumphant demon" (14) と直喩されている。他にも Jacob の内面や精神面ではなく、過剰な肉体的力、凶暴さに重点が置かれた表現が多い<sup>18)</sup>。そういった一種否定的な表現を駆使するのは、David の兄への憎悪に満ちた心理が、描写される時である。母の金を盗んだ David のやましい心にとっては、武器にもなる "pitchfork" を持った目撃者 Jacob の存在は、恐怖以外の何物でもない。

"David's guilt which made these prongs formidable" (7) と描かれるその刃先は、"trident" に置き換えると、それぞれ "possession (power, authority), lust, vanity" を示しているという<sup>19)</sup>。それらはそのまま、David の過ちの要素として挙げられるものである。所有 possession に関しては、渡航先で "large fortune" (40) を手に入れて人々を出し抜こうと考える点である。そこではかつての自らの幻想に気づき、自国へ戻るわけだが、Freely という新たな名とともに、Grimworth の家庭的な活気を墮落させつつ "the heightening prosperity" (25) を獲得し、困難を伴うからこそ余計甲斐があると考えて (33)、Penny をも手に入れようとする。このことは次の色欲 lust にも通じるが、それに関しては特に Grimworth で David が、女性に対して慇懃 "the gallantries of a lady's man" (28) でありながら、"a severity of criticism" を併せ持ち、"fastidious connoisseur of fair sex" (28-29) であるという側面が描かれる。Penny に関しては "submissive temper - likely to wait upon him [David] as well as if she [Penny] had been a negress" (33) との考えを抱き、Cupid に普通よりも鋭い矢を射られたものの (29)、エゴイスティックで、女性にあくまでも蔑みの視線を伴う。また Penny のみならず、黒人女性にも、両者に服従の姿勢を当然のこととしている。彼の偽善に普段はあまり気づかぬ周囲の人々も、Penny にたいする David の態度には疑惑を持ち、"[W]as it really love? and not rather ambition?" (29) と、首をかしげるのである。身分があり美しい Penny を妻にと望むことにも見いだされる、David の虚栄 vanity については、子供のころから人と違った生活を極度に追い求め、母の金を盗んだ後でも "[H]e would have been greatly hurt not to be thought well of in the world." (13), "David looked forward to being well received among strangers." (16) とあり、また Grimworth での David の嘘に塗り固められた暮らしにもそれは表れている。前にも触れたが Jacob が現れた時、必死で自らの身元を隠し、"idiot" をいたわる寛大な姿を演じるとき、偽善は頂点に達する。"David liked to be envied; he minded less about being loved." (54) という終局の一節が、彼の Grimworth での虚栄と生活の失敗という結果をすべて凝縮している。そういった3つの欲望は、それぞれ単独に呈

示されるのではなく、Davidのなかで複雑に絡み合う要素である。Jacobは図らずも、そんな欲望の権化に“pitchfork”を見せつける。そして、“the bright smooth prongs were a yard in advance of his [David’s] own body” (6)と、まざまざと見せられる弟は、ただ外見上表面的に恐ろしいばかりでなく、潜在的な意味においても不愉快この上ないわけである。

一方、語り手が “[a] learned friend” (6) に向けて語る客観的な描写の中には、“pitchfork”を持っていながらも、凶暴というよりもコミカルなJacobの姿が登場する。“like a reflective monkey” (10), “like a too officious Newfoundland”, “a wasp. . . leaving a sugar-basin” (15)<sup>20)</sup>とといった無邪気で微笑ましい動物の比喩が連なるのである。Davidが抱く、Jacobの強大で恐ろしいイメージに反して、Davidの計算高さのようなnegativeな知に偏重しない、Jacobの無垢な側面に光が当てられている。この描写は、他のテキストにも無垢なcharacterへの愛着から小動物の比喩がなされていることから分かるように<sup>21)</sup>、Jacobの醜態が焦点ではなく、語り手の愛情に満ちた視線の結果であると考えられる。また敷衍すれば、“idiot”を人間以下の種と見做すような不当な差別的な心理を呼び起こす心配のない、愛情に溢れた理想的な読者の存在を、語り手が信じていることが読み取れるであろう。このように読者と語り手には、愛情の存在が期待されるのだが、テキスト内のcharacterたちには、その存在が認められないようである。次の章では“Jacob”の共感と愛の欠如と、Jacobのcharacterとしての特色について考える。

#### IV

“Jacob”がEliotの作らしからぬテキストとして不評なのは、共感の欠如が原因であると言われる<sup>22)</sup>。確かに登場するcharacterのなかで、人間らしい愛情の存在が確認でき、読者の共感を集めるのは、Wordsworthの詩とも共通するFaux兄弟の母親ぐらいのもので、Pennyが幻想を抱いてDavidと陥いる疑似恋愛などには、かなりの皮肉が読み取れる。これは、main charactersに限定されることなく、Grimworthの住民にも見いだせるものである。夫が料理への不満を爆発させるのを恐れて、Mrs SteeneがFreelyの惣菜に頼り始め(23)、その怠惰が町中に広がって行くさま、夫たちはそれを出来合いの惣菜と認識していながら、以前より良くなった食卓に黙って満足していること、或いはPalfrey一家がDavidにまんまと騙されそうになるいきさつなど、体裁を繕い安易で表面的な方向に流れて行く人々の姿を、的確に捉えている。

そんな愛情の希薄さの中で、“love”という語を持ち出すのは、idiotのJacobである。しかしJacobが、“I love Zavy.” (46)とと言うとき、それは“I love lozenges.”とと言うのとかなり変わりはない。“lozenges”を黄色に設定したのは、苦し紛れにDavidがJacobに金貨が変化したものと騙すいきさつにもよるが、“sallow” (18), (19), (29), “yellow” (44), (48)と黄色が強調されているDavidの顔は、Jacobにとってはそのまま“yellow lozenges”に見えるのだとしても、過言ではないだろう。冒頭でconfectionerを夢見る幸福な空想に“yellow”ではなく“pink lozenges” (1)が登場し、Young Towersの頬は“the finest pink” (27)であることから、肯

定的な pink に対してこの "yellow" の必然性は明らかである。confectioner である弟への愛着は、すなわち confections への執着でしかなく、David は "a sort of sweet-tasted fetish" (10) とまで称されている。Jacob の David への愛情には "a wasp to the honey-pot" (54) のようにいわば、本能的な嗜好しかないのである。このように、不自然なほどいつも "pitchfork" を携えて、食欲の化身として描かれる Jacob は、従来の Eliot 作品にはあまり見られない flat な character といえるであろう。Eliot 読者が通常求める深みの欠如がクローズアップされるならば、その特色は短所にこそなれ、特長とは言い難いものとなる。しかし、Forster も論じるように、そういった character は分かりやすく、読者の心に留まって、再登場とともに容易に思い出される。その利点は "they are best when they are comic"<sup>23)</sup> と、コミカルなこの作品で効果的になる。

"Jacob" 特有の欠点とされる共感の欠如は、他のテキストの main characters にも見られぬ特色をもつ、ユニークな character としての Jacob の存在によって、補われているのである。

## 結 び

これまでの分析からまとめると、"idiot" としての Jacob の機能は、予期できぬことをしでかす喜劇的要素や David の偽善の強調、無垢で純粋な姿、常に携える pitchfork から広がる象徴性、そして flat character として読者へ強い印象を与えることである。社会的弱者としての Jacob に pitchfork を握らせ、逆に強者として弟の邪心を暴かせる構造は、単純であるがゆえ、読者に明確な伝達が行われる。語り手は、Jacob に本質を文字通り突く機能を、pitchfork とともに担わせる。黄色い顔色のせいで、弟 David を logenges の化身であるかのごとく追いつく "idiot" Jacob は、他のどの characters とも異なって、子供のように純粋で罪がないからこそ、Nemesis の代理を引き受けることができるのである。Jacob の存在は、lozenges が彼自身に色や匂い、振ると出る音、食感や味覚など快い感覚を提供するのと同様に、読者に容易に心地よい種々の感覚を提供する。lozenges を知性や心で味わうことは難しいように、"Jacob" もむしろ idiot の Jacob のように、素直にテキストのありのままを味わい、楽しむべきなのではないか。

Eliot は、*Romola* で知性に傾き過ぎて売り上げを伸ばせず、Smith にその埋め合わせとして、すでに創作していた "Jacob" を贈った。テキストの中で "idiot" としての Jacob は、弱者から強者へと転換され、その生き方と平行するように単純で心地よい感覚を醸し出し、*Romola* で凝り固まった感性をほぐすかのようである。平易さが災いして、些細なものと軽視されがちな本作も、Jacob の "idiot" たる必然性に照らすと、*Romola* のいきさつと併せて一層興味深いものになる。知性に惑わされず無垢だからこそ貴い存在への憧れが、Eliot 自身の中にも見いだせるからである。

## Notes

1) W. J. Harvey, *The Art of George Eliot* (London: Chatto & Windus, 1969), 212.

Leslie Stephen, *George Eliot* (London: Macmillan, 1902), 105.

Jerome Thale, *The Novels of George Eliot* (New York: Columbia U.P., 1986), 13.

以下のような、再評価の試みも存在する。

大嶋浩, 「‘Brother Jacob’ における道化的世界」『言語表現研究』7. (1991), 13-27.

Beryl Gray, ‘Afterword’ of “Brother Jacob” (Harmondsworth: Penguin, 1989), 59-74.

2) Gray 59.

3) Gray 57.

4) George Eliot, “Brother Jacob” ed. Beryl Gray (Harmondsworth: Penguin, 1989)

“Brother Jacob” の引用はこの版により、引用のあとの括弧はそのページ数を示す。

5) “Veil” では Latimer が、自らの予知が次々と現実のものになるのに恐れを抱き、悲劇的結末が描かれるのだが、“Jacob” では計画がことごとく裏目にでる喜劇が展開されて、並んで比較される2編が正反対の構図を示している。

6) 内田能嗣, 『ジョージ・エリオットの前期の小説』(大阪:創元社, 1989), 212.

Philip Fisher, *Making Up Society* (Pittsburgh: Pittsburgh U.P., 1981), 23.

7) Northrop Fry, *Anatomy of Criticism* (Princeton: Princeton U.P., 1973), 33.

8) ヘレン・スミス他, 『ノーマライゼーションの展開』(東京:学苑社, 1994), 87-88.

Peter Allan Dale, “George Eliot’s ‘Brother Jacob’: Fables and the Physiology of Common Life” *George Eliot Critical Assessments* 3. ed. Stuart Hutchinson (London: Helm Information, 1996), 256.

石川義博他, 『現代精神医学大系』(東京:中山書店, 1979), 1巻A 224-226.

9) Charlotte Brontë, *Villette* (New York: AMS Press, 1973), 183.

10) 上出弘之他, 『現代精神医学大系』(東京:中山書店, 1979), 16巻A 10, 17巻A 99.

精神医学の分類は、古くから以下の3段階とされてきた。軽愚または魯愚 (moron), 痴愚 (imbecility), 白痴 (idiocy) の順に重度になる。

11) Brontë 184.

12) Mrs. Gaskell, *The Life of Charlotte Brontë* (New York: AMS Press, 1973), 270.

13) F. B. Pinion, *A George Eliot Companion* (London: Macmillan, 1981), 128-29.

14) Samuel Taylor Coleridge, *Biographia Literaria* (London: Everyman, 1910), 184.

15) Ed. Eanest de Selincourt, *The Letters of William and Dorothy Wordsworth* (London: Oxford U. P., 1967), 352-58. 書簡の中で Wordsworth は次のように論じる。

I can only say that the loathing and disgust which many people have at the sight of an Idiot, is a feeling which, though having some foundation in human nature is not necessarily attached to it in any virtuous degree, but is owing, in a great measure to a false delicacy, and, if I may say it without rudeness, a certain want of comprehensiveness of thinking and feeling. . . . I have often applied to Idiots, in my own mind, that sublime expression of scripture that, “*their life is hidden with God*”. . . . my idiot is not one of those who cannot articulate and such as are usually disgusting in their persons. . . .

16) 石塚虎雄, 『ジョージ・エリオット論』(東京:篠崎書林, 1988), 145.

会田瑞枝, 「“Brother Jacob” における Contrivance と Innocence」『帝京大学文学部紀要』(英語英文学外国語外国文学), 23 (1992), 155. うろつきまわる Jacob (6) を捉えて, 「土を相手に地道な努力をする人間, 勤勉」とするのはいささか疑問が残る。

17) Ad de Vries, *Dictionary of Symbols and Imagery* (Amsterdam: North-Holland, 1984), 368. 475-76.

大嶋 18. 悪魔の姿が Jacob と David の両方に投影されていることで, 両義性のある道化としての要素を提示している。

18) このほかにも “the horrible Jacob” (13), “the bull”, “unmanageable”, “liable to fits of fury”, “formidable even without pitchfork” (15), “this ogre” (16), “an affectionate boa-constrictor” (17), “Gorgon or Demogorgon” (17), “a heavy animal stamping about and making angry noises” (45) とある。

19) アト・ド・フリース 『イメージ・シンボル辞典』 山下主一郎 他訳, (東京:大修館 1984), 654.

上記, Ad de Vries の “Trident” (475) の欄においては, 所有, 色欲, 虚栄と訳されている。



- 20) 大嶋 14. “wasp” に関して, 下手に扱えばチクリと刺される蜂の針にあたるのが, pitchfork であるとしている。
- 21) 拙論, 「Scenes of Clerical Life の “Mr Gilfil's Love-Story” -哀しみの飛翔: Caterina の苦悩-」 *PERSICA* 22. (1995), 45.
- 22) Gray 73.  
Gordon Haight, *George Eliot: A Biography* (Harmondsworth: Penguin, 1985), 340.
- 23) E. M. Forster, *Aspects of the Novel* (Orlando: Harcourt Brace, 1955), 73.

## “Brother Jacob” : Jacob as an Idiot

Masae UGAWA

*Faculty of College of Liberal Arts and Science,  
Kurashiki University of Science and the Arts,  
2640 Nishinoura, Tsurajima-cho, Kurashiki-shi, Okayama 712, Japan*  
(Received September 30, 1997)

“Brother Jacob” was written by George Eliot in 1860 and later given to George Smith in compensation for the disappointing sales of *Romola*. The titular character Jacob has been neglected as well as this short story itself.

The story is said to be a fable. With his mother’s stolen guineas, the youngest of the Fauxs, David, escapes to the West Indies. Though the dream, making a large fortune there, does not come true, he manages to get it with the false name at Grimworth. David as Mr Freely, however, loses what he should obtain with the arrival of his idiot brother Jacob.

The purpose of this essay is to point out the functions of Jacob as an idiot character. To show the importance of this role, the emphasis of his idiocy in the text, the actual social attitude of age toward idiots, and his symbolical descriptions are examined.